



Vision

生理学の研究は大切か？

同志社大学生命医科学部設置準備室

高橋 智 幸

サイエンスとテクノロジーはしばしば、ひとくくりに扱われるが、これは新たな「発見」をめざすサイエンスも、画期的な「発明」をめざすテクノロジーも、実験や理論によって進展し、人々にとって大切な結果をもたらすことには変わらないからであろう。実際、サイエンスの「発見」が「発明」につながることもあれば、テクノロジーの「発明」がサイエンスの「発見」をうながす場合もあって、両者が不可分の関係にあることは疑う余地がない。しかし、科学と技術の研究における頭脳の使い方は、かなり違っていて、同一人物が発見と発明の両方で成功するケースは稀のようである。生理学は言うまでもなくサイエンスに属している。

「発明」は「必要」に迫られて生まれて、人の役に立つことは万人の認めるところであるが、「発見」と、それをめざす科学としての「生理学の研究」が役に立つか否かは必ずしも明らかでない。「科学」が大切なのは「技術」を支えるからだろうか。生理学が大切なのは、医療技術や農業技術に役立つからだろうか。もしそれが科学、生理学の研究の主要な価値であれば、役に立つかどうか分からない基礎研究よりは、技術に直結する応用研究が大切ということになるであろう。

以前、日経新聞のコラムに論説委員が、次のような内容の文を書いていた。「自然科学は人文科学と同様、われわれの文化を支えるものである。自

然科学の価値は人文科学と同様、役に立つかどうかで判断されるべきものでなく、人類共通の文化資産に貢献するか否かが問われるべきである」。また、別の記事には「テクノロジーを押し上げるのは科学者である。前人未踏の道を進む科学研究者は常に壁にぶつかり、その壁を突破するために、しばしば、新たな技術を求める。この要請に応じて、新技術が開発されると、その成果が、翻ってテクノロジーの飛躍的な発展をもたらすことがしばしばある」という主旨のことが書かれていた。生理学の研究も、このような形でテクノロジーに貢献する可能性があることに改めて気付かされた。文科省の英語名称 Culture, Sports, Science and Technology を論文の謝辞に記載する際に Sports という単語を見て、サイエンスとスポーツを同一範疇として扱って良いのだろうかという疑問を抱いたことがあるが、いずれも、広い意味で人々に役立つものという意図なのであろう。テクノロジーは「実学」と呼ばれるが、科学としての生理学はあえて言えば「虚学」であろう。しかし虚数も掛け合わせれば実数になり、「見えないものが大切」なことはバイブルも仏教も説くところなので、生理学の研究に携わる自分達は「役に立つかどうか」はひとまず置いておいて、自らが重要と思いつくことのできる研究に全力を注ぐべきなのであろう。